

永久歯列完成までの咬合誘導

角町 正勝（角町小児歯科・長崎市開業）

咬合誘導とは歯の萌出から永久歯列の完成迄の期間を通して、いわゆるアクセプタブル・オクルージョンを達成するための管理と処置の一連の行為を指すものと考えています。それ故小児発達期の一断面だけではなく、発達期全体を通しての有機的な診断が大切です。しかしながら、必ずしもこの期の診断が確立しているとはいいがたく、そのうえその対応が個々の患者の口腔の健康に対する認識や、それにもとづく主訴の違いによってゴールが異なるなど変動する要素が多いために一層困難になっています。これらの問題を克服して小児の口腔の健全な育成をはかるために、私達小児を担当する歯科医は認容できる形態的・機能的な咬合誘導のゴールを共通理解することが大切であると考えています。

私は0才から15才迄の発達期の小児の歯科治療を行っていますが、この期の咬合誘導を行う段階で次のような咬合誘導実施上の問題に直面する機会が多くいつも判断に迷う毎日です。

- 1) ウ蝕処置等と違って咬合の異常に対する処置は患者サイドの認識の程度によって実施するかしないかが決まる。（患者自身が咬合異常の初期症状を問題意識をもって捕らえることが困難である為、処置勧告をしても実際に処置にはいれるケースが多くない）
- 2) 患者サイドの口腔の健康に対する認識の違いによって目標とする咬合誘導のゴールの設定が変わってくる。（当然のこととはいえ患者が主訴として持っている悩みが術者サイドで考える治療目標と大きく異なることが多い。）
- 3) 咬合誘導を行う処置と管理の術式がまだ十分に確立していない、と同時に咬合誘導のゴール設定が充分できていない。
- 4) 咬合誘導の管理と処置の期間が長期に渡るためその期の患者管理に対するシステム作りが難しい。

今回は以上のような問題について症例などを通して紹介し共に考えて行きたいと思っています。